



TITLE:

三通小考

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. 三通小考. 經濟論叢 1938, 47(4): 451-465

ISSUE DATE:

1938-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131161>

RIGHT:

京都市大學經濟學會

經濟叢論

第四卷 第十四號

昭和十三年十一月一日發行

論叢

三通小考

法學博士 財部 靜治

起債増税比較論

經濟學博士 汐見 三郎

土地利用組合の一つの型

經濟學博士 八木芳之助

時論

中支法幣對策

經濟學博士 飯島 幡司

支那法幣の發行銀行

十 龜 盛 次

研究

我國産業革命の始期

經濟學士 堀 江 保藏

カール・メンガーの社會政策學批判

經濟學士 白杉庄一郎

ミユルダールの經濟變動理論

經濟學士 青山 秀夫

說苑

軍需工業に對する國家統制

經濟學士 大塚 一朗

臨時地方財政補給金の一考察

經濟學士 田 杉 競

附錄

彙報

外國雜誌論題

(禁轉載)

經濟論叢

第四十七卷 第四號 (通卷第貳百八拾號)

昭和十三年十月發行

論叢

三通小考

財部 靜治

一

支那に於て特に文物典章のみを選びて特殊の史的研究を試みたる諸典籍を生じ、而も夫等文獻中には食貨編を收め、田制、戸口、賦税、錢幣、平準(均輸)平糴(常平倉義倉)等の諸題目を取扱へるがために、經濟史的研究上有用資料を含むこと多しとすべきは、經濟學及統計學研究の目的上興味深く感ずる所なり。素よりそはその以前に「史記」を始めとし支那歴代の普通史書中食貨に關する特別篇を收むるの事實と密接なる關係を有すとすべく、それは又西洋にその流れを汲める輓近經濟學理の意義と支那中古以來行はれし經濟の通義と自からその選を異にせることと相俟ちて注意すべき所なり、即ち一例として大宰春台はその著「經濟錄」中「凡天下國家を治むるを經濟といふ、世を経し民を濟ふといふ義なり」(經濟總論劈頭)と説き、この道は即ち先王の道にしてそは六經に備はると

し（その後延享二——西紀一七四五年の別著「六經略說」も大同小異の説に富む）この道を修むるは經術にしてそは即ち經濟の術なりと即言し（享保一四——西紀一七二九年五〇歲當時の自序中）宋以後に寧ろ普通となりし熟字經濟の用例を古へ迄推し及ぼさんとせるの嫌あり、從ひて同書中取扱ふ所も今日經濟學固有の内容に適合すべき「食貨」以外禮樂、官職、天文、律曆、地理、祭祀、學政、章服、儀仗（附鹵簿）、武備、法令、刑罰、制度、無易、易道の十五題目に及び、恰も漢武帝時代の人司馬遷の史記中禮、樂、律、曆、天官、封禪、河渠、平準の八書を收め、後漢の班固前（西）漢の世を記せる漢書を作り其の體裁悉く太史公に倣ひしも、書を改めて志と名づけ、律曆志、禮樂志、食貨志、郊禮志、天志、溝洫志を作り又武帝以來の時勢進展に鑑み別に地理志、刑法志、五行志、藝文志を加へて都合十志となし、爾後國史を剛修する者に範を垂れし痕を慕ひたり。（前出經濟總論參照。因云、此體裁を參酌しつつ本邦特殊の史實を取扱へる唯一の大著「大日本史」食貨志は建國より鎌倉時代に及び總說二冊の後を承け戸口、田制、賦役、——上、中、出舉、下、調庸地子雜物貢獻物、倉庫——義倉常平倉附簿帳、供御、封祿——上、下、賑恤——恩給附、山野河海池溝堤防道路橋梁驛傳馬牛津濟船舫、市肆交易度量權衡、莊園——保名附の一四冊を收めたり）就中史記の平準書は兎も角とし漢書以來の歷代食貨志が何れも一朝代の事蹟を敘するに過ぎざるに對し、時代を通貫し制度の變を一括取扱へるものとして通典、通志、文獻通考、續通典、續通志、續文獻通志、清通典、清通志、清文獻通考を含める所謂「九通」あり、その中特に重んずべきは唐杜佑の通典、宋鄭樵の通志略、宋末元初に生を享けし馬端臨の文獻通考なり、こは即ち本編に於て少しく考察せんとする三通なり。

本邦上古の制度文物が支那に負ふ所多かりしは周知の事實なり、江戸幕府以前に於て此事跡に言及せる者は姑く措き、徳川時代に至り是に留意すること深かりし一人として先づ擧げ得べきは荻生徂徠なり、即ちその一著中には言へり、「朝廷の禮樂制度は皆唐朝の法なり、今世の堂上有職の家に傳へたるは皆冷泉、圓融、華山、一條の御代（八六八—一〇二一年）より以後朝廷衰へたる時の制度なり、吾國上代の書籍を見たらんには吾國の道と云ふものは何もなきと云ふこと辨ぜずして明かなるべし。吾國の神道とも云べきことは祖考を祭りて天に配し、天と祖考とを一つにして何事をも鬼神の命を以てとり行ふこと文字傳はらざりし以前よりのことなれども、是も亦唐虞三代の古道なり、後世の理學（西洋流の理學と全く別異の觀念を有す）の見識畢竟鬼神はなき物と云に落着するゆえ當世の儒者聖人の妙道を知る人なし、其の弊放逸邪見になりて天をも畏れず鬼神をも畏れず、邪智益々盛になりて終には聖人をも輕くするに至る、是皆目にも見へぬ冥々の中のことを道理を以て説明かさんとするが故なり、神道はなきことなれども鬼神は崇むべし、まして吾國に生れては吾國の神を敬ふこと聖人の道の意なり、努々疏にすましきことなり」（隋の王通「太平十二策」に倣ひ一七—一六—三五の享保年中に著はせる「太平策」日本文庫第二編收録八頁參照）と、右所說中我神道も亦聖人の道なりと斷じ、當世の儒者聖人の妙道を知らずと譏れるが如き、獨斷の嫌なきやを疑はしむるも、本邦古代の文物典章が支那に負ふ所多きを指摘せるは可なり。而して同一見地に立脚し筋道を整へ和漢制度の沿革を考證論說すること六二項、就中主力を支那の制度に注ぎつつ一著となせるものに伊藤東涯の制度通（享保九—一七二四年東涯自敘、長子善詔寛政八—一七九六年校正上木）あり、同著の目的とせる所は著者の自敘並に右刻本に跋せる善詔の一文にも明かにせらる、即ち著者は謂へり「自_下腆支質_レ我_、貢_三厥經典_二因高之

使隋、眞人之聘唐、而文籍之道興巧、律令格式、專遵唐制、而其宏綱大要、百世有賴、然則謂吾國全讓中夏可乎、謂吾國不必用中夏可乎、曆象之法、祖乎尙書、紀元之號、肇乎漢史、都邑之制、出于周禮、大極之殿、始乎魏氏、道國郡鄉之設、準道州縣鄉、官省諸司之掌、倣三省部寺、凡厥禮樂兵刑之著、律度量衡之制、皆莫不有所由本焉、夫聖人之大經大法、或襲或革、傳至吾國、以逮今日、豈謂之異方之宜、上世之事、可不務講究其所由焉哉」と、本朝の制を參へ説くの用意を忘れざらんとし、或襲或革とし謂ひ又謂吾國全讓中夏可乎とし我邦が古來支那模倣のみに甘んずることなかりしを指摘せるは多とすべきも、三代以來宋明に至る支那文物の沿革に主力をおきしの旨意はによりて明かなり、宜なる哉本書を賞揚せる湯淺常山(南郭の門人)の著文會雜記(日本文庫第二編收錄五二頁)中左の言をなせるや、「東涯ノ學問ハ仁齋ニ倍セリ、名物六帖ナト只ヌキ書トノミ心得ヘカラス、譯ヲツケタル處殊ノ外ニ心ヲ用キタル物ナリ、中々及カタキアツキ學問ナリ、制度通ナト隨分文獻通考杜氏通典明會典ナトヲ能ヨミテクト吞込メテ仕立タル物ナリ、大抵ニ書ヲ精密ニ見タルハカリニテナラヌコト也ト南郭語リタマヒキ」と、かくて大正元年飯田傳一校訂に係る新刊制度通に序せる市村瓊次郎序中の一節は、簡潔によくその意を盡し得たり、曰く「我カ制度ノ基因ヲ知ラント欲セハ、先ツ之ヲ支那ニ索メサルヘカラス、而シテ支那ノ制度ニ關スル書固ヨリ乏シカラスト雖、或ハ浩漭ニ失シ、或ハ一時代ニ限ラレ、悠々タル支那歷代ニ通シテ其ノ沿革變遷ヲ説キ、併セテ我カ制度ノ來由スル所ヲ示シテ、要ヲ得タル者獨リ伊藤氏制度通アルノミ」と、而して又恰も同書の短を指摘せるものとして明治二十三年萩野由之、小中村義家共編日本制度通あり、即ちその例言中には曰く、制度の沿革を敘するの書乏しく、希に大日本史の志類伊藤東涯制度通の如

きあれども、或は浩漭、或は太簡にして、初學に便ならずと、その太簡と謂へるば制度通を指せるものなるべし、吾人は本邦の古制と支那との關係に關しかく挿説せる後を承け、前記三通に就き略説せんと欲するも、その以前に尙典章文物を究むるの必要に就き、少くして昌平學に學び後兵法、武藝を以て名あり、常に殉身報國を志したりとせらるる平山行藏の著「實用館讀例」(寛政七、即西紀一七九五年の著、前田日本文庫二編中收録、僅かに二〇頁を出てざる小冊子なるも頗る卓拔の評論に富む)中吾人が前に時代を通貫し制度の變を一括取扱ふと言へるの趣旨敷衍を以て初めつつ典章文物を究むるの必要に就き説く所は要を得たりと考ふるを以て之を引用せんと欲す、その説によるに曰く「典章經制ヲ明カニセサレハ、存亡理亂ノ因ル所ヲ知ルコト能ハス、故ニ馬氏文獻通考ノ序ニ竊嘗以爲理亂興亡不相因者也、晉之得國異乎漢、隋之喪國異乎唐、代各有史、自足以該一代之始終、無以參稽互察爲也、典章經制實相因也、殷因夏、周因殷、繼周者之損益百世可知、聖人蓋已預言之矣トアレハ、制度ヲ知ルコト學者ノ第一義ナリ、其大要ヲ舉レハ禮樂兵刑之制、賦歛選舉之規ヨリ以下、官名ノ更張及邊要ノ形勢ノ如キ因循損益アラサルコトナシ、其變通之故馳張之術未タ遽カニ言易カラスト雖モ、後學ノ心ヲ究ムヘキ所ニ非スヤ、馬貴與又云考制度審憲章、博文強識、之固通儒事也ト、然レハ典章制度ニ明ラカナラサレハ、通人達士ト云ニクラサルヲ知ルヘシ」と。

三

杜佑は唐京兆萬年之人、字君卿(又岐公とも稱す)開元二三年生元和七年歿(七三五—八一二年七八歲)以父蔭補參軍、德憲兩朝、拜司空、進司徒、封岐國公、性嗜學、雖貴、夜分猶讀書(辭源)と傳へらる、その著通典(See, Ma-hai

Pinghua, The Economic History of China, 1921 中之を簡單に General Record, 780 A. D. と米譯せるは要を穿たざるの嫌あり) に就き辭源には其書因劉秩政典而廣之、分食貨、選舉、職官、禮、樂、兵刑、州郡、邊防八門、上溯唐虞、下暨唐之(玄宗)天寶(七四二—七五五年)凡二百卷とあり、每門各子目を分つ、清乾隆時、勅撰續通典一百四十四卷、皇朝通典一百卷はその例を踏襲して成れる所なり、佑自序曰、夫理道之先在乎行教化、教化之本在乎足衣食、洪範八政一食二貨、夫子曰既富而教斯之謂也、夫行教化在乎設職官、在乎審官才、在乎精選舉、制禮以端其俗、立樂和其心、此先哲王政治之大方也、故職官設然後興禮樂焉、教化隳然後用刑罰焉、列州郡俾分領焉、置邊防遏戎狄焉、是以食貨爲之首、選舉次之、設官又次之、禮又次之、刑又次之、州郡又次之、邊防末之或覽之者庶知篇茅之旨也と欽定四庫全書簡明目録卷八中簡潔に包括宏富、義例嚴整、繁不至冗、簡不至漏、爲數典之淵海と稱揚す、歷代因革の故繁然として考ふべし、唯普通の刻本中諸儒の討論辨駁の如き多く之を附載せざるは遺憾なり、通志及文獻通考皆此書を藍本となせるも、是等二書が唐天寶以前の事蹟を記するや、精博則終不逮とは前記簡明目録に附説せる所、又鄭多泛雜無歸、馬或詳略失當、均不及是書之精核とは四書全書總目提要第八十一卷政書類一中に評せらるる所なり、同提要は併せて又本書中肅代以後間沿革亦附載註中其中とせるを特記し、各門に互り載せられたるものと載を失せるものとを例示せり、例令は食貨門の賦稅中、載周官貢賦、而太宰所掌九貢之法失載とせるが如きは然り、本邦に於て古學を重んじたる徂徠及東涯共に通典を特に尊重せる所以茲に存すべく、Latourette の如きも亦新型によれる歴史に先鞭を着けたる傑作と劇賞せり。^{*}(支那學藝大辭彙中通典、國民百科大辭典中加藤繁、杜佑及通典の二項参照)

* Cf. Latourette, Chinese: their History and Culture. 2, ed. I. p. 21 F.

四

市村瀧川共纂支那史中(卷五、九八、九九頁)には言へり、制度文物の沿革を史記したるものとして「鄭樵ハ通志ヲ撰シ玉應麟ハ玉海ヲ撰ス、皆博引廣證ニシテ史學ニ益ス」と、就中玉海二百卷に就き東涯の秉燭譚卷一には曰、甚浩繁なり、事類をあつめたる書なり(法性寺關白兼定公の記せし玉葉五十卷、後に改めて玉海、名は同じことなれども書の體は同じからず)と、蓋し古事物名に關する百科辭彙の一つとして輕視し難き一著たりと雖も史の體裁を備へたりとするを得ず。

南宋の鄭樵は福縣省莆田人、字漁仲、官至樞密院編修、居夾漈山、學者夾漈先生、樵好爲考證倫類之學(辭源)晩年名山大澤に好み遊び、奇を搜り古を訪ひ、藏書家に遇へば借留し讀書して乃ち去る、博學強記を以て知らる、生歿年不詳なるも、一説によれば紹興二年歿五十九歲(一一〇四—一一六二年)、その著の一として通志あり、是より先貫通古今之史として起三皇訖梁武帝撰通志四百八十卷あり、(現失)鄭樵通史之例に仿ひ之を爲る、前掲提要は卷五十別史類中に本書を紹介し其結構を概説して曰く樵負其淹博、乃網羅舊籍參以新意、撰爲是編、凡帝紀十八卷、皇后列傳二卷、年譜四卷、略五十一卷、列傳一百二十五卷、其紀傳刪錄諸史稍有移掇、大抵因仍舊目爲例不純、其年譜仿史記諸表之例、惟間以大封拜大政事錯書、其中或繁或漏亦復多岐均非其注意所在、其平生之精全帙之菁華、惟在二十略而已と、三皇より隋に及ぼせり、後に清乾隆時勅撰續通志五百二十七卷、皇朝通志二百卷は之を承けて成れる所なり、自序中にも言へり、氏族、六書、七音、天文、地理、都邑、諡、器服、樂、藝文、校讎、圖譜、金石、災祥、昆蟲草木の凡十五略出臣胸臆、不涉漢唐諸儒議論、曰禮略、職官略、選舉略、食貨略

凡前五略、雖本前人之典亦非諸子之文也と(通志略五一卷は民國六年刊四部備要第三集にも收む)提要中全略に互りて評する所聊か繁にわたるの嫌あるべきも、その内容の一斑に通ずるの目的上甚だ有用なるを以て之を引かんか、曰く其氏族六書七音都邑草木昆蟲五略爲舊史之所無、案史通書志篇曰、可以爲志者其道有三、一曰氏族志二曰都邑志三曰方物志、樵增氏族都邑草木昆蟲三略蓋竊據是文、至於六書七音乃小學之支流非史家之本義、矜奇炫博泛濫及之此於例爲無所取矣。餘十五略雖皆舊史所有、然論器服乃禮之子目、校讎圖譜金石乃藝文之子目、析爲別類不亦冗且碎乎、且氏族略多桂漏六書略多穿鑿、天文略祇載丹元子步天歌、地理略則全鈔杜佑通典、州郡總序一篇前雖先列數行僅雜取漢書地理志及水經注數十則、卽禹貢山川亦未能一一詳載、論略則別立門而沈約扈琛諸家之論法悉刪不錄、卽唐會要所載臬字諸諡亦竝漏之、器服略器則所載尊彝爵之制制罍既詳、又與金石略複出、服則金鈔杜佑通典之嘉禮、其禮樂職官食貨選舉刑法之六略、亦但刪錄通典無辨證、至職官略中以通典註取引之典故悉改爲案語大書更爲草率矣、藝文略則分門太繁、又韓愈論語解論語類前後兩出張弧素履子、儒家道家兩出劉安淮南子、道家雜家兩荆浩筆法記乃論畫之語、而列於法書類吳興人物志河西人物志乃傳記之流、而列於名家類段成式之玉格乃酉陽雜俎之一篇而列於寶器類尤爲荒謬、金石畧則鍾鼎碣核以博考古二圖集金石二錄脫略至十之七八、災祥略則鈔諸五行志、草木昆蟲略則并詩經爾雅之註疏亦未能詳と、而してその後を承け之を該括して蓋宋人以義理相高、於考證之學罕能意、樵恃其該洽睥睨一世、諒無人起而難之、故其高志濶步不復詳檢、遂不能一一精密、致後人多所譏彈也と謂ひ、此意味により通典通考の間に在りて鼎立する能はざるを明かにしたり、本邦平山行藏(前出)も亦大同小異の趣旨により之を略評し、特に禮、職官、選舉、刑罰、食貨の五略を抜ひて全く通典を寫せるものと

し、「又天寶以來の事迹を以て陸續詮次せざるは何ぞや、杜公の書は右の五略十にして八に居る、これに因て觀る時は其の優劣如何自から見るに堪へたり」とせり、而も亦提要は之に附するに讃辭を以てし、特其採摭既已浩博、議論亦多贅闢、雖純駁互見而瑕不掩瑜、究非游談無根者可及、至今資爲考鏡、與杜佑馬端臨書竝稱三通亦有以焉となせり、別に又前文中一回に止まらず別語によりその趣旨を説ける如く通史之例肇司馬遷、故劉知幾史述二體則以史記漢書爲一體、述六家則以史記漢書別爲兩家、以一述一代之事一總歷代之事也、其例綜括千古歸一家言、非學問足以該通文章以足鏘鏘則難以成書とすべきあり、Latourette は通志がかく歷代之事を總ふるの一書たるを重んじたるか、輓近西洋學者の諸標準に照して判するに鄭樵は確かに宋代史家の第一位に値ひすとせり、上來説き來れる所に對照して首肯し兼ねる所なり。(尙國民百科大辭典中福井康、鄭樵及通志の二項參照)

五

馬端臨は宋(江西)樂平人、字貴與、(乘燭譚中「杜甫字のこと」中曰く貴與と云は易の雜卦に臨觀の義或與或求と云より出るなり、苟することなしと)博極群書、以陰補承事郎、宋亡隱居教授鄉里、遠近師之(辭源)、生歿年不詳なるも第十三世紀中に活躍したり、著はす所大學集傳、多識錄、文獻通考等の書あり。(大正十五年發行支那人名辭書四版中一一〇九參照)宋亡び元起るに及び(一二七九年)彼は身を著述に委ね全く官途の念を絶ちたり、かくて一大古代文物考は父廷鸞の遺業を承繼し二十年の歲月を費して成れり、該博精核を窮むとせらるゝその文獻通考(前田 Lee か之を General Research in Literature and Authorities. A very comprehensive collection of extracts from all kinds of authoritative writings from the beginning of written records to the 13 th century, classified according to topics, with occasional Comments and exp

* Cf. Latourette, *of. cit.*, I, p. 266.

anations by the author とせるは大意を得たり、唯著者の經歷を以て一三二二—一三七〇年とせるは何に據れるか)は因通典廣之、爲二十四門凡三百四十八卷、所述事蹟、上承通典下迄宋寧宗(辭源)、(馬廷鸞、字は翔仲、淳祐の進士翰林權中書省舍人に累官す、兩制皆手に出つ、度宗立つて右丞相兼樞密使に拜せらる、賈似道と合はず、觀文館學士に除せられ、洞霄宮に提舉たり、著はす所六經集傳等の書あり、力めて相位を辭して曰く、天下安危、人主不知、國家利害、群臣不知、軍前勝負、列士不知、陛下與、元老大臣、惟懷永圖、臣死且瞑目と。——前田支那人名辭書一一〇頁、明治二七年發行ラフィリット支那文明論一七三—五頁參照)平山行藏は言へり、文獻通考の如きに至りては節目明備去取精密にして然も諸儒を論辨概舉して漏すことなし、又馬子父子の評論及釋義を附載して以て斷案とす、其の成規は全く杜岐公の書に根據し、博考之に過ぎたり、可謂制度之學至此而極れりと、著者が引古經史謂之文、參以唐宋以來諸臣之奏疏諸儒之議論謂之獻とせるは是なり、門の名目とせる考中田賦(水利田、屯田、官田、籍田附七卷)錢幣(二卷)戸口(戸口丁中賦役、奴婢、傭賃、品官占戸二卷)、職役(鄉黨版籍職役、復除、二卷)征權(征南關市、鹽鐵禁、權酷禁酒、權茶坑冶、雜征斂山澤津渡、六卷)市糴(均輸市易和買常平義倉租稅、社倉、二卷)土貢(進奉羨餘、一卷)國用(漕運、賑恤、鑄貨、五卷)選舉(舉士、賢良方正、孝廉、武舉、任子、童科附小學、吏道、賞選進納、方伎、舉官、辟舉、考課、十二卷)學校(太學、祠祭褒贈先聖先師、幸學養老、郡國鄉黨之學、七卷)職官(官制總序、官數、三公總序附四輔二大、其他百官、二十一卷)郊社(細目略、二十三卷)宗廟(細目略、十五卷)王禮(細目略、二十二卷)樂(細目略、唯度量衡を(收むることを注意す、二十一卷)兵(細目略、十三卷)刑(細目略、十二卷)輿地(總數、古冀州、古兗州、古青州、古徐州、古揚州、古荊州、古豫州、古梁州、古雍州、古南越、九卷)四裔(細目略、二十五卷)を收めたる十九門は共に杜公の規則に倣へり、其餘經籍(細目略、七十六卷)帝系(細目略、十卷)

封建(細目略、十八卷)象緯(天文を意味す、細目略、十七卷)物異(天變地災を意味す、細目略、二十卷)の五門は通典に載せざる所なり、故に諸書を採摭して修成せるものなり、通典に載する天寶以前の事はその漏るゝものを増益し、天寶以降宋の寧宗嘉定の末(十七年—西紀一二三四)迄の事は續けてこれを成せり、宋制に詳しく宋史の缺を補ふに足る、(國民百科大辭典中加藤繁、文獻通考参照)今三通がその分目及編次の同異を如何に呈露するかを窺ふの一助として、食貨以外田制、賦貢、錢幣、戸口、職役、征、權市糴、國用等の諸篇を合纂して昭和十二年陳荇蓀により發行されたる中國歷代食貨志續集の目錄を併載せんか、通典より引く所食貨、一、田制上、二、田制下、三、鄉黨、四、賦稅上、五、賦稅中、六、賦稅下、七、歷代盛衰戸口、八、錢幣上、九、錢幣下、十、漕運、十一、鬻爵、十二、輕重平糴常平義倉、次に通志より引く所食貨略、一、田制、陂渠、屯田、賦稅、歷代戸口、丁中、二、錢幣、漕運、茶鐵鹽、鬻爵、權酤、算緡、雜稅、平準(均輸)、平糴(常平義倉)なり、次に文獻通考よりは(前文參看)田賦考七卷、錢幣考一卷、戸口考二卷、職役考二卷、征權考六卷、市糴考二卷、土貢考一卷、國用考五卷を採れり、通考に就き簡明目錄に雖分條排纂不能如通典之剪裁鎔鑄成一家言、然上比佑不足下比鄭樵有餘也と謂ひ、提要に能貫穿古今折衷至當、雖稍遜通典之簡嚴而詳瞻實爲過之、非鄭樵通志所及也と評せるは、共に穿ちて要を得たりとすべからん、而して今單なる特殊史籍として之を讀む以外、現在及將來を推すの示唆として幾何の價值あるかを知るの一端として、自序中兵制に就き敘する所を引かんか、曰く後世士自爲士農自爲農工商末技自爲工商末技、凡此四民者平時不識甲兵爲何物、而所謂兵者乃出於四民之外、故爲兵者甚寡知兵者甚少、一有征戰則盡數驅之以當鋒刃無有休息之期、甚則以未。嘗訓練之民而使之戰、是棄民也、唐宋以來始專用募兵、於是兵與民判

然爲二途、諉曰教養於平時而驅用於一旦、然其季世則兵赦愈多而驕悍而劣弱爲害不淺、不足惟以疲國力而反足以促國祚矣と、之を現事變に於ける民國の軍卒に照し來りて果して何等の感がある。最後に尙歐米學徒の所見をも參酌することゝせんに、支那學者として後世に影響すること深かり A. Remusat の如き本書を讚美するの餘り左の言を發したり、「卓絶せる本書はその儘一の書庫なり、支那の經籍中別に何等備ふ所なしとするも、本書だけ讀まんとするがため、支那の言辭を修得するの要あるべし」とかくて彼自身はその諸内容に深く注目し多くの章節は全譯するの値ありとせり、素より同書中には西洋人自身が古典として重んずるものを引用するなく、書中の同一題目に就き西洋諸國に知らるゝものには編者無知なりしがために、その立說に今一段の完備を加へ得ざりしと雖も、祖國諸先賢に就きての深刻なる研鑽公平なる比較を遂げ、多方面に互り眞に重要な事物を詮索し又正當に辨識し、史的興味深き諸題目に關する該博の事實及意見を採録せる本書の如きを、その文獻中に宿すの一事實にても、支那は國民として誇るに足るとは「中國」の著者 Williams の推稱せる所、^{*}現に支那の古事を究めんとする歐人間には永年に互り珍重せられたり。

六

主題略敘の後を承け更に尙附説したきは、支那通として名聲を馳せその著書の一つとして支那經籍史 *A History of Chinese Literature, 1901* をも有する英人 Herbert A. Giles が、支那文獻の特色として指摘せる所なり、氏は第一に言へり、支那の文獻が「史的敘説之を考證し得べき限りに於ては精確」とすべきを出色とす、凡そ一般歐米人の間に普ねく行互れる印象によれば、支那人は一般に不確實なりとするにあるも、眞理とすべき前の言説は之

* Cf. S. Wells, Williams, *The Middle Kingdom*, 4, ed, 1861, Vol. I. p. 549.

を匡正して餘りあり、右普通印象を生めるも一つは支那に住める歐米人の多數が、主として無教育なる階級と接觸するの事實に因るものなり、支那に於ける右階級は他の各國に於けると同様、言説不精確に流るゝや著し、されど支那特にその上層階級民に關する知識を積む時は、教養ある支那人が任せられたる仕事に當る際用意周到たり、その周到は自然に史的引證上精確を期するの事實に對する尊敬を大に増すに至らん、歷代因革の故繁然と評せられし通典か、後世支那の學者間に重きをなすに至りし一事之を證して餘りあり。

titles は次に支那文獻の特色として「氣品ある標準高潔なる理想を宿し、鄙猥及曖昧の跡全く存せざるを」擧げたるや、傳的文獻並に支那の學徒が藝文中に數ふる一切の著作物に就きては確かに眞なり、かく言へばとて一切の場合に於ける支那人行動の高風支那人の談話純眞なりとの保證をその言説に伴ふことなし、支那文明にありては書籍中に鼓吹せらるゝ道德あるも之を勵行せしむるの力なし、支那研究に當れる英人として同じく令名を揚げし Robert K. Douglas が、支那に關する一著序文中支那に於て唱へらるゝ高德は、生活の實際上その通り *as they are* なるに非ずして、その通りなりと裝はるゝ *as they professed to be* のにありとせるも亦此點を指摘せるものなり、支那に於て急務中の急務とすべきは、恰もその一般民衆をして自國文獻中に説かれたる諸理想を實踐せしめ得べき道義心又誠意に存するの一例を見る、又支那人の日常生活に通ずる者は凡て野卑曖昧が俗人談笑の間に於て顯現せらるゝこと、是等資質が西洋諸國民の特有する所に勝れるを知る、支那俗衆間に弘く行渡るも俗語により書かれたるがために、支那の識者により藝文として承認されざる幾多著作物に於て、右二點が恰も支那文獻の特色たるの逆保證與へらる。

以上の二主旨は三通に就き等しく適切なりと考ふる所なるが、Bashfordは之に附するに尙他の一特色を以てしたり、支那の文獻が具體的又實際的にして一切の場合中庸を説くに努むとせるは之なり、杜佑が中其中とせりとせられ馬貴輿が能貫穿古今折衷至當と評せらるゝも之がためなり、支那人の心性は實際的たりとの鑄型に鑄込まれたり、常識の點に於て支那人はアングロサクソン民族特に又北米に於けるその支裔を凌ぎ、經驗の賜たる坦道を逸せざらんとす、具體的實際的なるを存致し幻想的にして靈的又無窮なるの存在を無視するは、支那文獻上等しくその出色とすべき所なり、「是を千古に見ず」との一語は克くあらゆる未驗の經驗を斥ぞく、哲理上よりせんか其の常識はその最上解説を支那の中庸說中に宿し、又孔子教との關係上之を保全したり、支那の文獻はその各頁中殆んど皆支那人の人生觀を反映せしむ。

されど常識にはその前程に凡そ涯りあり、即ち人をして自恣以上に出でしむること殆んどなし、重ねて踏むことなからんとするの道路を修築するは夫れ何故ぞ、餘命幾何もなく新果を自から收むるの見込なき樹を仕立つるは夫れ何故ぞとするが如き、常識の桎梏並に共同心の欠缺あり、又眼前の利害に囚はれて未來の同胞如何なる運命に遭はんかを憂ふるの心なきがために、現支那人は貧弱なる道路及立木なきの千丘萬嶽により、幾千萬の蒼生を黃泉の旅路に上らしめつゝあり、常識より躍進逸脱して想像力及信念を培ふがために、始めて公民を創造者たらしめ得べきも、支那人はかゝる想像力を缺くとせるは之なり、^{*}特に之を最近數十年の支那變革に照し來る際、右後段に説く所稍酷に失せざるやを疑ふと雖も大體としては當れりとするを得ん。

* Cf. Bashford, China, pp. 160-162.

近年革新の氣運沛然として支那新人の間に起り、夥しき新著は夫等の人々により頻々として發行せらる、その中には書中引用されし支那典籍の抄録に參考價值を發見する以外、思想を陳ぶるものとしては寧ろ歐米人の著書を讀むに如かずと想はしむるもの尠きに非ず、然れども持てあます程の支那古籍の寶庫中邦人の探查精研を持つものは多し、明治以來西洋化の大濤に吞まれ漢籍に親しむの風は大に衰へたと共に、近くは皇軍の威武東亞大陸の諸地方に互り高く揚げられ、無命の間に文藝を放ちつゝ之に亞ぐの要あるを只管覺らしむるの時切に之を感じずんば非ず、何れにしても支那經濟及社會の研究に當り經世濟民又齊民の大計を講ぜんとする者としては、之に關する歐米人の幾多述作を涉獵すると共に、その方面に關する夥しき支那古文獻に親しみ、その有用研究資料を搜すの要あり、以上簡單に紹介し來れる三通の如きはその最たるものなり、人或は訴へん漢籍の白文を讀むは歐文に通ずるより難しと、中等漢文教育の素養を有するに過ぎざる者と雖も、遠征勇士の辛酸刻苦を想はゞ此難關を突破すること何かあらん、素よりその氣運濃厚に實績も亦相當に舉れる漢字制限運動は、普通教育の目的よりせは至當とするを得ん、然れども忘れ去られんとしつゝありし急需支那學を學徒に迫らんとしつゝある際、研學の軌道に還るは寧ろ研學の良心により攻めらるべき所に非ずや、時變の緩急を解せず徒らに漢籍を死語死文として葬り終るは吾人の與みし兼ねる所なり。